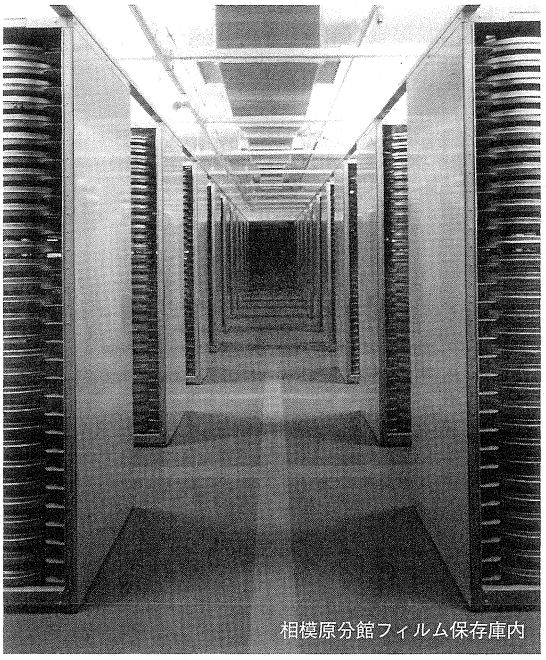


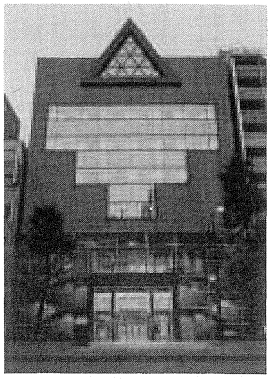
フィルム・アーカイブの仕事

東京国立近代美術館フィルムセンター
主任研究員 入江良郎

東京国立近代美術館フィルムセンターの歴史は、我が国でははじめての国立の美術館として国立近代美術館（現在の東京国立近代美術館）が開館した1952年にさかのぼります。その美術館の中に映画部門が設置されたのは、ニューヨーク近代美術館（MOMA）をモデルにしたものといわれています。もっとも、MOMAが映画保存に乗り出したのは1935年のことで、すなわち無声映画の時代が終わりを告げたころには早くも映画の保存に着手していたことになります。ちなみに、同じ時期に映画保存に乗り出した機関には、フランスのシネマテーク・フランセーズ、ドイツやイギリスの国立フィルム・アーカイブがあり、これらが集まり1938年に発足したのが国際フィルム・アーカイブ連盟（FIAF）です。



相模原分館フィルム保存庫内



東京国立近代美術館フィルムセンター（NFC）の外観

このような先進国の趨勢と比べると、日本の映画保存がスタートの時点で大きな遅れをとった感は否めません。日本は世界的にも多量の映画を生産してきた「映画大国」に数えられていますが、一方では失われた映画の多さ（残存率の低さ）においても突出しているという、あまり喜べない状況があります。

しかし、我々の挑戦は、このような現実をしっかりと見すえることから始まるのだ、ということもできます。それは、いま現在も散逸の危機に瀕しているフィルムを一つでも多く救い出すことにほかなりません。フィルムセンターが極めて短期間に急速な成長を遂げたアーカイブであることは、自他ともに認めるところです。諸外国の「ナショナル・アーカイブ」と同様に、現在のフィルムセンターでは、「自国映画」の全体を保護の対象として位置づけ、劇映画はもちろん記録映画やニュース映画、教育映画、PR映画、産業映画、さらには企業外映画までをカバーすべく、収集対象を拡大し続けています。その成果は、年間数千本にも及ぶ近年の収集本数にも表れています。

こうしたなか、しばしばもたらされる大きな「発見」も我々を勇気づけています。ロシアのゴスフィルモフォンドで発見された350作品もの日本映画が、平成16年度までに里帰りを果たしたこと、平成15年度に明治期の映画商社、吉澤商店が撮影した1911年当時のオリジナル・ネガが発見されたことは近年のほんの一例ですが、これらは、まだまだ新たな発掘の余地が残されていることを示しています。一方、平成19年には、文化庁との共同による「近代歴史資料緊急調査（映像フィルム・映画関係分野）」が実施され、文化財としての映画の保護にいっそうの弾みがつくことも期待されています。

さて、このような収集・復元・保存の成果により身近に接してもらう機会の一つに、「発掘された映画たち」という上映企画があります。今年6回目を迎える本企画でも、海外同種機関やコレクターの協力により発見された貴重な作品、デジタル技術を用いて復元された上映プリントなど、最新の成果を一堂に集めて紹介する予定です。

あらゆる映画フィルムの最終保存施設をめざすフィルム・アーカイブの仕事は本来地味な作業ですが、その重要性を一人でも多くの方にアピールしていきたいと考えています。

東京国立近代美術館フィルムセンター
〒104-0031 東京都中央区京橋3-7-6
TEL：03-3561-0823　ハローダイヤル：03-5777-8600
URL：http://www.momat.go.jp

他機関との協力 機会を開くために

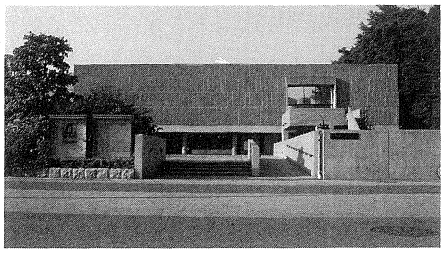
国立西洋美術館
研究員 横山佐紀




館内で行われたイベント

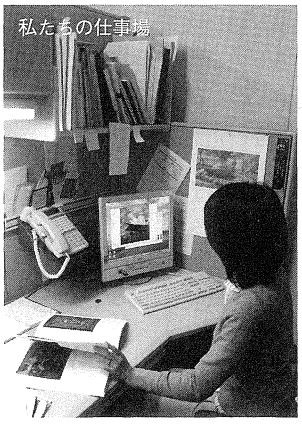
「できるだけ多くの方に美術館に来ていただき、楽しんでいただきたい」。これが教育普及に携わる者の基本的な考えです。しかし、これを実現するためには考えなければならないことがたくさんあります。その一番の課題は、これまで国立西洋美術館に来たことがない人たちや来にくいと感じている人たちに、いかにして関心をもってもらうのかということでしょう。

昨年の夏、教育普及室ではインターンとともに来館者調査を行いました。その調査の過程で明らかになったのは、「美術館（当館を含む）に行く人はよく行くし、情報もよく知っている」ということでした。当館（他の美術館でもよいのですが）にはリピーターとなる層がいて、その方たちは美術館に行くたびに展覧会や、教育普及プログラムなどの情報に接し、これらの情報をもとにまた美術館を訪れるというサイクルがどうやらできあがっているようなのです。これはあたりまえの現象かもしれませんが、重要なのはむしろこの裏側にあるもので、「“美術館（当館）に来たことがないから来ない人たち”がおそらく多く存在する」ということだと思います。もちろん、美術館や美術の押しつけをしようなどとは思っていません。ただ、もしも機会やきっかけがないことで美術館が遠い場所になっているのならば、その機会を提供するのが私たちの仕事のひとつではないかと考えています。

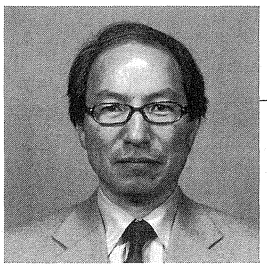

国立西洋美術館外観

そのような機会が、他の機関との協力によって思いがけず開けたできごとがありました。昨年秋に行われた「ムンク展」で、ある土曜日の閉館後、企業の社会・環境室と協力し、当館初の試みとなる障害者のための鑑賞会を行うことができたのです。その社会・環境室はCSRとしてすでに障害者対象のさまざまなプログラムを過去に積み重ねており、当日の補助としては社員ボランティアを活用するという体制ができあがっていましたが、美術館で障害者プログラムを行うのははじめてでした。一方の当館にとっては、企画展に障害者の団体を迎えることはまったくはじめてのことでした。そこで両者でかれこれ半年ほどかけて打合わせを重ね、準備を進めました。その甲斐あってか当日は順調に進み、参加者にたいへん喜んでいただきました。混雑する企画展にはなかなか行きにくいという障害者の方に展覧会をゆっくりとご覧いただけたことは、私たちにとってもうれしいことでしたが、同時にこのように新たな機会が、他の機関との協力によって成り立つこともあるということを認識する重要な経験ともなりました。

外の機関と協力する際は、それぞれが経験やノウハウを持ち寄りながら、できること（できないこと）、そして何よりもいっしょに行うプロジェクトが何を目指しているものなのかを確かめていくプロセスが非常に重要です。今後も、このようなプロセスを経ながら、より多くの方に美術館を楽しんでもらう機会を提供できるような、他機関との協力の可能性を探っていきたいと考えています。


私たちの仕事場

国立西洋美術館
〒110-0007　東京都台東区上野公園7-7
TEL：03-3828-5131　ハローダイヤル：03-5777-8600
URL：http://www.nmwa.go.jp



臨床保存学の確立を目指して

東京国立博物館
学芸研究部保存修復課長 神庭信幸

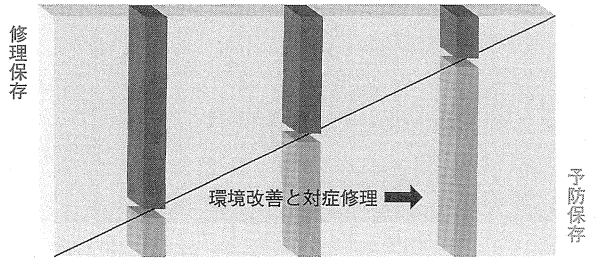
文化財保存修復に携わる者の使命とは何でしょう。第一は、文化財を保存、公開、継承していくために必要な技術や手段を具体的な実践に利用し、かつ最大限に生かすことです。第二は、保存に関する研究あるいは教育の促進です。そして第三は、文化財保護が促進される社会を目指した普及活動です。

博物館では一番目の具体的実践が使命の中心です。文化財の収蔵、公開、そして未来への継承のために、劣化した大量の文化財に対して、的確な処置を迅速に、しかもタイムリーに行う必要があります。これを臨床的対応つまり臨床保存学と言います。

＊

臨床保存学の最大の使命は、予防を中心とした保存を実践することです。修理中心のキュア（cure）から予防中心のケア（care）への転換です。傷んだ文化財の修理は必要ですが、それ以上に文化財が傷まないために何をするかが大切なのです。

図　博物館が必要とする保存は修理中心のキュア（cure）から予防中心のケア（care）へ



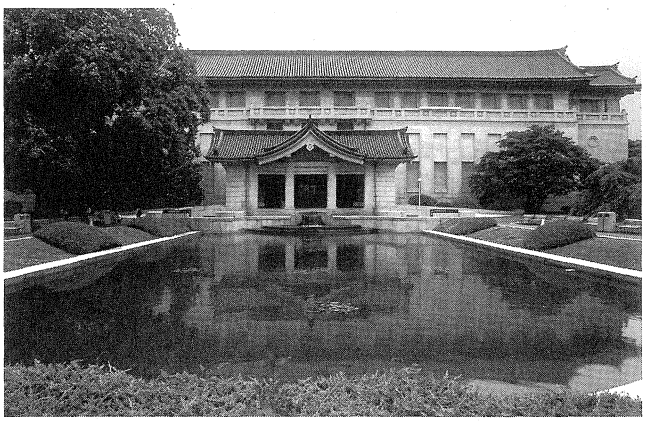
それから、保存の術を駆使することです。医術、芸術などと同じように「術」は技のことです。文化財にはさまざまな劣化があり、それを抑制するためには、保存科学的な観点からその原因を究明することは不可欠ですが、管理する人間や組織を動員して必要な改善策を実行に移し、習慣化しなければなりません。科学の力で問題を明らかにし、人や組織に意識変革を促す必要があるのです。両者を同時に進めていくことが重要であり、つまり臨床保存学はサイエンスであるだけではなく、人に働きかける力が必要なのです。

そして、全体を見通した包括的な保存であるべきです。保管と公開のどちらか一方だけを考えるのではなく、両方にとって安全な環境を作ることが望ましいのです。修理と予防、管理と公開といったことすべてを見極めながら、見通しをもった保存を行わなければなりません。劣化がすすみ、ときには傷みを抱えた文化財から危険を取り除くという目的に向って、文化財をマネジメントするのが保存の臨床家ということになります。

＊

私たちの日々の実践は、①収蔵庫や展示場内の環境や文化財の状態の調査診断、②保存環境の整備を進め、文化財に発生した軽度の傷みに応急的な処置として対症修理を施す予防保存、③すでに傷みが進行した文化財の本格修理を計画的に実施する修理保存などから成り立っています。文化財の状態を記録した保存カルテは毎年増え続け、一万件（収蔵品数の10分の1）程度が現在の目標です。温湿度、生物生息、空気環境などのデータは約10年分が蓄積され、博物館環境の特性が徐々にわかってきました。十分と言えないまでも、対症修理と本格修理は年間で数百件を行うまでになりました。こうした一連のプロセスをわかりやすくすることで、博物館で働く誰もがそれぞれの立場から保存修復の事業に参画できるよう努めています。

最後に、トーマス・カーライル著「時代の兆候」からの一節をご紹介して終わりにしたいと思います。「われわれの主たる務めは、遠くにかすんでいるものを見ることではなく、目の前にはっきりと見えるものを実行に移すことである」



東京国立博物館外観

東京国立博物館
〒110-8712 東京都台東区上野公園13-9
TEL：03-3822-1111
URL：http://www.tnm.jp/

子どもはほんものが好き
博物館教育の現場から



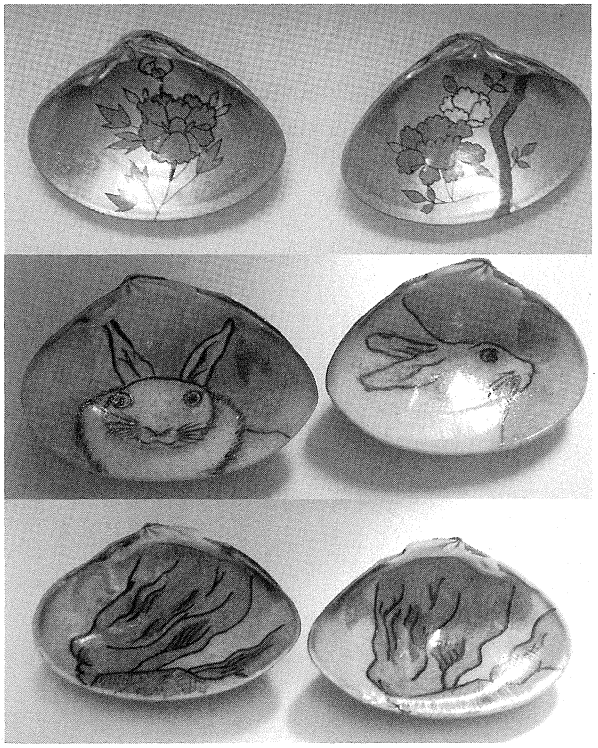
東京国立博物館
学芸企画部博物館教育課教育普及室長 小林 牧

東京国立博物館の教育プログラムのターゲットの第1は子どもたちである。豊かな感性をはぐくむ年齢層の子どもたちが、日本の伝統文化に、優れた美術工芸に触れる機会をもつこと。それが私たちの願いだ。では、子どもが喜ぶ企画とはなんだろうか。

昨年の春、当館では江戸時代の銅製の鏡を使った拓本のワークショップを行った。鏡に刻まれた富士山や鶴、亀、松などの伝統的な文様は、現代の人気キャラクターとは正反対で、動きが少なく色もない。子どもたちは、この「古臭い」モチーフに拒否反応を示しはしないだろうか。それを墨一色で写し取る地道な作業に集中できるのだろうか。答えは、イエスだった。ずっしりと重い鏡を手にしたときの子どもたちの驚きと喜びは、見ているこちらに震えがくるほどだった。研究員によるデモンストレーションで、繊細な鶴の模様が浮かび上がったのを見た子どもの口からは「かっこいい……」というつぶやきがもれた。



拓本ワークショップ

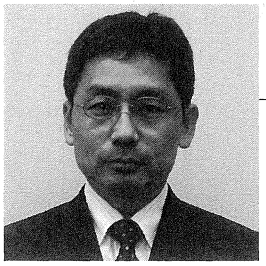


子どもたちによる作品（貝合せワークショップ）。江戸時代の博物図譜や、伊万里の皿の文様、江戸の大火を描く瓦版の挿絵をモチーフにしている

夏から秋にかけて行った貝合せのワークショップでは、江戸時代の貝合せの作品を鑑賞したあと、実際にハマグリの殻に絵を描かせた。モチーフは本館の展示作品から探すこと。それが課題だ。子どもたちは、敷居が高く難解といわれる日本の古美術をどう咀嚼するのだろうか。蓋をあけてみたら、その心配は無用だった。子どもたちの心をとらえたのは水墨の画面に飛んでいた鳥、伊万里の皿の兎、江戸の大火を描いた瓦版の挿絵など実にさまざま。貝合せのモチーフとしては考えにくいものまでが、デザイン化され、ユニークな作品が生まれた。

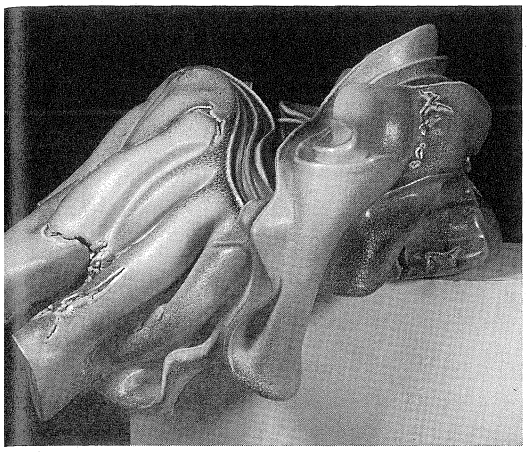
正月には料紙装飾をテーマに唐紙模様を刷るワークショップを企画した。1000年以上前の美しい唐紙のパターンをそのまま樹脂版に起こし、雲母を混ぜた白い絵の具で刷る。子どもたちは、刷った紙を陽にかざしてきらきら光る雲母の模様に何度も感嘆の声をあげ、展示室の古筆にじっと見入った。

作品理解のためには知識が必要。作品のバックグラウンドを知らずして古美術は理解できない、と言われる。それは確かに正しい。しかし実際には、「知識がないからわからない」と作品を目の前にして心を閉ざしてしまう大人のなんと多いことか。一方子どもたちは、仕掛けを工夫しきっかけさえ与えれば、知識など抜きにしてまず作品と向き合い、そのよさを感じる能力をもっているように思える。そう、子ども向けプログラムの使命は、作品に向き合う動機づけを演出することにあるのだ。なぜなら、ほんものの力は理屈抜きで子どもを釘づけにするから。私はそんな現場に立ち会う幸運に何度も恵まれたことを、心から感謝している。

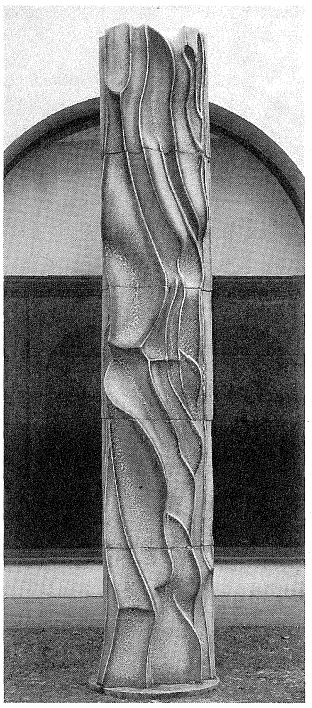


「カルロ・ザウリ展」をめぐって

東京国立近代美術館
工芸課主任研究員 唐澤昌宏



《形態のうねり》1979年　カルロ・ザウリ美術館蔵
Photo: Massimiliano Fantini



《塔》1986年　カルロ・ザウリ美術館蔵
Photo: Massimiliano Fantini

東京国立近代美術館では6月17日から8月3日まで、「カルロ・ザウリ展　イタリア現代陶芸の巨匠」を開催します。

昨年10月に京都国立近代美術館を皮切りに巡回が始まったこの展覧会は、イタリア陶芸界の重鎮として長年にわたりイタリアのみならず、世界の現代陶芸を牽引し続けてきたカルロ・ザウリ（1926～2002）の没後初めての回顧展として位置づけられています。

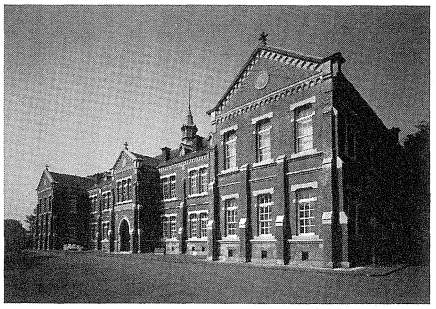
「陶芸」と聞くと、壺や鉢などの実用的な形を思い浮かべる人も少なくないと思います。ところがザウリの作品は、機能や実用にこだわることなく、素材である土と自己との密接な関わり合いの中から生み出されており、一般的に彫刻と呼ばれる作品と何ら変わらない姿をしています。このようなザウリの作品に対して、陶による彫刻という意味で「陶彫」という言葉が用いられることも少なくありません。

ザウリは、最初からそのような取組を行ったかというと、実はそうではなく、制作を始めた1950年代の前半のころは、他の陶芸家が壺や鉢をつくるのと同じように、器の形を持った作品をつくっていました。もともとイタリアでは、マジョリカ焼きと呼ばれる陶器が盛んにつくられていたことから、ザウリもその伝統を受け継いで制作を行っていたのです。それがしだいに、素材として土を使う理由や土を立ち上げる道具を使うことの必然性などを考えていくことで、自己と素材や、自己と陶芸など、作品をつくる上での根源的な関わり合いを問い続けるようになり、ついには、器としての機能を放棄し、器をたんなる造形のひとつとして捉えて、自らの表現や素材の可能性、さらには陶芸の可能性を追求し始めたのです。

ところが、このような動きはイタリアのザウリだけでなく、日本やアメリカの陶芸家にも見られ、ほぼ同時多発的に世界の各地で興っているのです。このような陶芸を自己表現のひとつの手法とする動きは、その後、さまざまな美術動向を吸収しながら発展し、今日では、その素材でしかつくり出すことができない造形世界を生み出しています。

この展覧会では、ザウリ自身が愛着を持ち、厳選して自分の手元に残してきた作品が中心になっています。その中には、高さが5mを超える陶芸とは思えないスケールの大きな作品《塔》をはじめ、ザウリの造形活動の中でも重要な時期につくられた、海の波や砂丘の風紋、あるいは女性の身体を連想させるような柔らかな表現を見せる作品などが含まれています。それらには、陶芸に対するザウリの熱い想いが映し出されていると言えるでしょう。

このように展覧会は、ザウリの約40年の活動の軌跡を辿る内容になっていますが、そこには、イタリア現代陶芸の歴史、ひいては世界の現代陶芸の動向をも知る手掛かりがあるように思います。

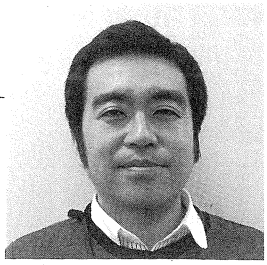


東京国立近代美術館工芸館の外観
＊「ガウロ・ザウリ展」は、東京国立近代美術館本館にて開催。

東京国立近代美術館工芸館
〒102-0091 東京都千代田区北の丸公園1-1
TEL：03-3211-7781　　ハローダイヤル：03-5777-8600
URL: http://www.momat.go.jp/

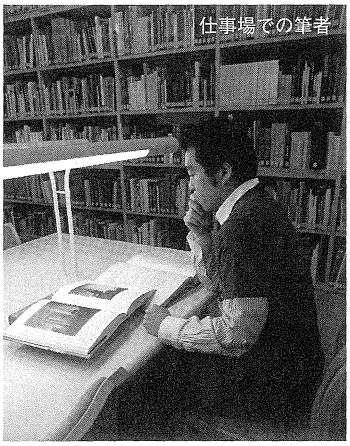
これまでにない美術展を目指して

国立西洋美術館
主任研究員 **佐藤直樹**





「背を向けた若い女性のいる室内」
ヴィルヘルム・ハンマースホイ、ラナス美術館蔵
Photo：Niels Eric Høybye



仕事場での筆者



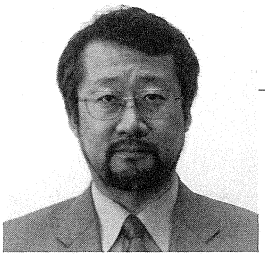
国立西洋美術館外観

2009年に国立西洋美術館は開館50周年を迎えます。この祝祭の年に合わせるかのように、ル・コルビュジエによって設計された本館が、フランス政府より世界遺産の候補としてユネスコに申請されました。この申請が通れば、東京初の世界遺産となります。これによって、当館の存在意義もよりいっそう高まることとなり喜ばしい限りです。

国立西洋美術館は、開館以来、常に話題となる美術展を開催してきました。その歴史を振り返ってみても「ミロのヴィーナス」展（1964年）、ヨーロッパ21か国が参加した「西洋の美術」展（1987年）、また入場者が100万人を超えた「バーンズ・コレクション」展（1994年）など、世間の話題をさらった展覧会がいくつも思い出されます。こうした大規模な展覧会の他にも、研究員が独自に作り上げた、いわば西洋美術ファン向けの知的好奇心をくすぐる展覧会も多数開催してきました。一例を挙げても、パリのオルセー美術館とのはじめての共同研究による「ジャポニスム」展（1988年）、中世ドイツの木彫をまとめて展示した「聖なるかたち」展（1994年）、最近では現存する希少な作品を購入したことをきっかけに開催された「ラ・トゥール」展（2005年）などが、美術ファンの注目を集め成功をおさめてきました。こうした学術性の高い展覧会を開催することができるのも、50年にわたる西洋美術館の国際的な活動の歴史があってのことです。歴代の研究員が海外の美術館と信頼関係を築き上げてきてくれたおかげで、現在の我々の企画が成り立っていると言っても過言ではありません。その伝統を受け継ぎながら、これからどういった展覧会をつくり上げていくのかが、我々の課題となっています。

さて、今年の9月30日より、19世紀末デンマークの画家ヴィルヘルム・ハンマースホイの大回顧展を日本ではじめて開催します。長く等閑視されてきた作家を積極的に紹介していくことも西洋美術館の重要な役割だと思っています。この展覧会は、筆者がドイツ人研究者と共同で3年前から準備を進めてきたものです。日本では全く知られていない作家なので、どういった反応があるのか、今から楽しみでなりません。この画家の創り出す静謐な雰囲気、モノトーンを基調とする渋い色彩は、我々日本人の美意識に強く訴えてくるに違いありません。また、この展覧会は6月24日からロンドンの王立美術院で先行公開されます。オルセー美術館に巡回した「ロダンとカリエール」展（2006年）に続いて、国立西洋美術館から海外に向けて発信する展覧会となります。このことは、当館の研究員が国際的水準で研究していることを海外の美術関係者に広く知らしめてくれるはずです。こうした活動が、次の世代の国際的展覧会につながる貴重な財産となることを我々は信じています。

国立西洋美術館
〒110-0007 東京都台東区上野公園7-7
TEL：03-3828-5131　ハローダイヤル：03-5777-8600
URL：http://www.nmwa.go.jp/



日本最古の四天王像、降臨！

奈良国立博物館
学芸部長補佐 岩田茂樹

四天王とは仏の世界の四方を守護する4体の守護神をいいます。守護神だけに鎧を身に着け、邪鬼を踏みつけ、武器を振り上げて、眼をむいて怒号する姿が一般的です。有名な作品に、奈良時代に造られた東大寺戒壇堂の塑造（そぞう）四天王像があり、その写実的な風貌は強い印象を与えます。ところがここに紹介する法隆寺金堂の四天王像は、およそ四天王らしくない四天王といわざるをえません。たしかに4体のうち3体が武器をとり、邪鬼の上に立ってはいますが、4体ともほとんど同じポーズで邪鬼の上に静かに直立し、その顔もわずかに眉をひそめるものの、烈しい怒りの表情は見ることができません。しかし現在のこの像の表情は、彩色の剥落と褪色によって元の風貌とは変わってしまっているようです。



赤外線写真



国宝 広目天像（四天王のうち）

写真は4体のうち広目天像の顔を赤外線撮影したものです。かすれてしまった墨の線がこれによってはっきりと見えます。肉眼では少し眠いような表情に感じられましたが、実はこのように明快でめりはりのきいた容貌であったことがわかります。いかにも大陸的な武神のイメージです。

四天王がその背を踏んでいる邪鬼の姿も一風変わっています。東大寺戒壇堂四天王の邪鬼では、激しく踏みつけられ、苦痛にうめく声が聞こえてきそうな生々しい表現ですが、この法隆寺金堂像では、4体の邪鬼はいずれもおとなしくうずくまって四天王を乗せ奉っているように見えます。しかしこれも実は誤りです。よく観察すると、両手両足に巻きついた帯はブレスレットのような飾りではなく、邪鬼を縛りつけ身動きできなくしている拘束（こうそく）具です。怪物のような風貌は、中国の後漢時代から南北朝時代にかけての美術に見いだせる鬼神形に通じるものです。胸乳がふくらみ、丸々した太鼓腹であることも両者に共通しています。これら邪鬼はまだ荒々しい鬼神の性格を残しているために身を縛られ、いやいや四天王に従っていることがわかってきます。

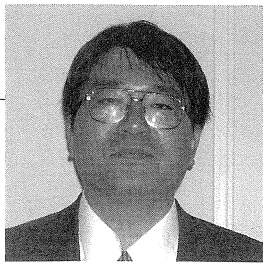


奈良国立博物館外観

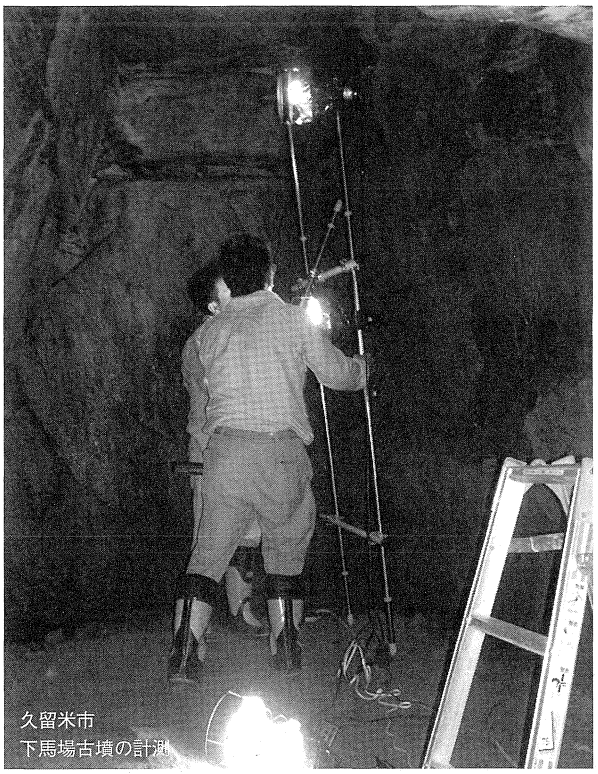
6月14日から7月21日まで奈良国立博物館で開催される特別展「国宝　法隆寺金堂展」には、この四天王像が史上初めてお寺の外で公開されます（4体がそろうのは7月1日から）。展覧会カタログに作品についての解説を書くとき、たとえ小さくとも何か発見があれば筆はずいぶん進むものです。今回は、赤外線写真の成果があったのと、邪鬼が縛りつけられていることの意味に気がついたので、ずいぶんと楽しく執筆することができました。

奈良国立博物館
〒630-8213 奈良市登大路町50
TEL：0742-22-7771　URL：http://www.narahaku.go.jp/

九州の装飾古墳を再現する



九州国立博物館
学芸部企画課文化交流展室長 河野一隆



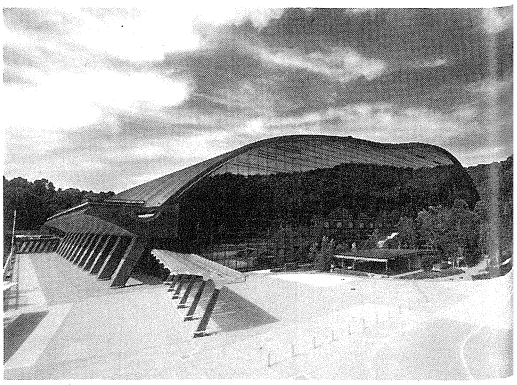
久留米市
下馬場古墳の計測

九州にはさまざまな石の文化が展開しますが、装飾古墳もその一つです。全国で650基あまり存在し、その約半数が福岡県・熊本県に集中しています。装飾古墳というと、奈良県高松塚古墳やキトラ古墳を想像される方も多いでしょうが、北部九州の装飾古墳には、①飛鳥の壁画古墳よりも100年以上前に造られたこと、②幾何学文様が主体で、人物や具象文もシルエット状に表現されること、③顔料も天然の鉱物質のものであることという、両古墳にはない3つの特徴が見られます。いわば、日本最古の絵画の伝統を今に伝える資料として重要なものであり、それは装飾古墳の大部分が国史跡に指定されていることからも分かります。

装飾古墳は顔料や線刻で壁画が描かれるといった特徴のため、風化や褪色に対して他の遺跡以上の保護が必要です。未発掘の古墳が開口された段階から、石室内の温湿度環境は不安定になります。中に立ち入った人間の吐く息によっても二酸化炭素濃度が上昇し、カビを育てる原因になります。装飾古墳の保存にとって最適な方法は密閉し非公開とすることですが、見学者は限られてしまいます。この保存と公開の矛盾を解決するためには、公開に重きをおいて期間を限定して公開する方法と、保存に重きをおいて代替品を常時公開する方法の2つがありますが、このうち、後者にはレプリカを作って公開する方法とここで述べるCGによる映像コンテンツを上映する方法とがあります。

九州国立博物館では、装飾古墳を来館者に鑑賞いただくために、デジタルでいかに再現するかに取り組みました。その一つとして、東京大学池内克史研究室と凸版印刷の共同研究および東京文化材研究所のご協力によって、実際の装飾古墳をレーザー計測データにもとづいて5分ほどのバーチャルリアリティ（VR）画像を作成しました。これは、当館の文化交流展示室（平常展）内にある「装飾古墳バーチャルシアター」という展示室内で、現在、4本の番組を交替で上映中です。もう一つの方法は、実際の装飾古墳に対する写真測量を応用してパソコン上で再現するものです。これだとレーザー計測よりも軽量なデータができるため、正射投影図に出力して基本台帳としたり、インターネットでの情報発信が可能となります。九州国立博物館では、装飾古墳の画像データをGIS（地理情報システム）と組み合わせた装飾古墳データベースを平成14年度から配信中であり、好評を博しております（http://kyuhaku.jmc.or.jp/）。

装飾古墳の保存と公開の問題は、将来も研究と実践が試みられていくでしょう。しかし、デジタル技術の活用によって、保存と公開に折り合いを付け、今までにない装飾古墳の鑑賞体験を来館者へ提供することができるのではないでしょうか。それが、装飾古墳の中心地に立地する九州国立博物館の使命のひとつなのかもしれません。



九州国立博物館外観

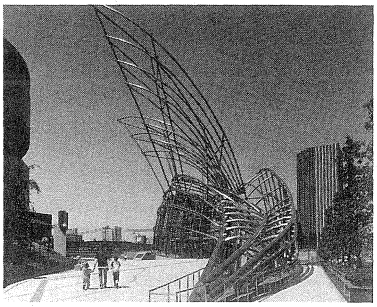
九州国立博物館
〒818-0118 福岡県太宰府市石坂4-7-2
TEL：050-5542-8600（ハローダイヤル）
URL：http://www.kyuhaku.jp/



コレクションを楽しむ機会をつくること

国立国際美術館
研究員 藤吉祐子


子どもたちと「ビジュたんけんたい」を実施している


国立国際美術館外観

国立国際美術館が、1977年の設立以来収集し続けてきているコレクション（所蔵作品）の数は、現在では約6000点にのぼります。昨年の開館30周年を記念した展覧会では、そのなかから選りすぐりの約450点を、当館初の試みとして全フロアーを使用して展示しました。

これだけのコレクションを一堂に会してご紹介する機会はまたとありませんでしたので、少しでも多くの方々にコレクションに親しんでもらえるよう、会期中に、小中学生から成人一般向けまで、幅広い展覧会関連プログラムを組みました。なかでも、ふだん小中学生向けプログラムの企画を中心に担当している筆者にとって、この「大コレクション展」をふんだんに活かして、子どもたちにいかにしてコレクション鑑賞の楽しさを伝え、鑑賞の機会が身近なものであるかを知ってもらうことに努力しました。

その結果、「美術館のコレクションからスタートする見ることの楽しみ」という意味を込め、「コレクションからはじまる楽しみ」と企画全体に銘打ち、コレクションに親しむ切り口によって、細かいプログラムを設定することにしました。大勢の来館者がいる展示会場での作品鑑賞に対して戸惑いを覚えがちな小学校低学年向けには、その抵抗感を低減するために、アートカード・ゲームで軽くウォーミングアップし、実際に見てみたい作品を決めた後に、たんけんマップ片手に小グループごとに作品を巡る鑑賞プログラムを実施しました。コレクションを自分たちの好みで「切り取って」見ることがある程度可能である小学校高学年から中学生向けには、撮影した作品写真を一つのリーフレットとして展開し、いわばオリジナルの展覧会カタログとして編集する「あなたのコレクション」や、作品を見る視点を定めることにもつながる、気に入った作品を鑑賞するための椅子をミニチュアで作る「ミニチュアイスをつくってみよう」を、前者はグラフィックデザイナー、後者は家具職人を講師に開催しました。


「びじゅつのひみつ」

最後に、詩人でもある当館館長が講師を務め、現代美術の醍醐味を直球で子どもたちに投げかけるギャラリー・トークを行った後、タイトルの「びじゅつのひみつ」どおりに、言葉遊びなどをきっかけに現代美術のひみつ＝おもしろさをさぐることを、提案しました。この最後のワークショップは、「今回のワークショップでは何を持ち帰れますか？」といった頻繁にいただくお問い合わせにお答えできるような、いわゆる目に見えた「成果物」というものは一切ありませんでした。しかし、いっしょに「なぞ」に迫っていくという点において、一番創造的だったのではないかと思います。

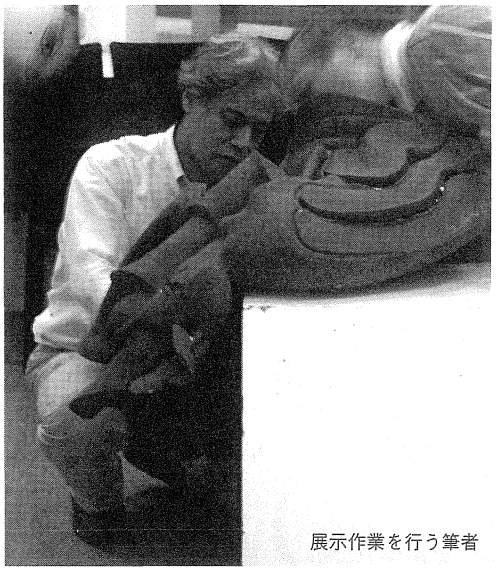
このように、どのプログラムにおいても、「見る」ことを主眼に据えながら、いずれ子どもたち自身が自ら「見る」ことを楽しむようになることを願い、これからも子どもたちがコレクションひいては美術作品との距離を縮められるよう、橋渡しとしての役割を行っていきたいと思っています。

国立国際美術館
〒530-0005 大阪府大阪市北区中之島4-2-55
TEL：06-6447-4680　ハローダイヤル：06-4860-8600
URL：http://www.nmao.go.jp/

研究員の仕事

京都国立近代美術館
主任研究員 **松原龍一**





展示作業を行う筆者

京都国立近代美術館は、昭和38年国立近代美術館（現東京国立近代美術館）の京都分館として設立されました。その後、昭和42年に分館から独立することとなり、東京国立近代美術館、京都国立近代美術館と現在の2つの国立近代美術館となりました。京都国立近代美術館には、フィルム・ライブラリーはありませんが、それを除くと東京国立近代美術館と所蔵作品の内容はほぼ同じものです。例えば、日本画、洋画、工芸、写真、版画などです。

博物館も同じですが、美術館の大きな仕事としては、作品の収集、保存、調査研究、展示に分けることができると思います。作品の収集は、美術館で収集しなければならない作品の購入や寄贈を受けることですが、これも調査研究や展覧会などを通してなされることが多いものです。京都も東京も近代美術館ですので、当然近代以降の作品となりますが、近代といっても何時頃からかと疑問に思われる方もいらっしゃると思います。近代の区分については色々な意見があることと思いますが、私は一応江戸幕末以後、とくに明治以降を対象と考えています。

作品の保存は、作品を安全に少しでも長く現在の状態より悪くならないようにするために、材質・形状を考えて温湿度が管理された収蔵庫で保管しています。当館の収蔵庫は3つに分かれており、各々温度湿度が設定されています。材質・形状からどの収蔵庫で保管するかは研究員の判断となります。

調査研究は、我々研究員にとっては重要な仕事で、この調査研究により作品の購入や寄贈が行われたり、展覧会の開催などに結びつきます。調査研究の中で、今まで所在が不明であった作品や資料などが出てきた時には無上の喜びを感じます。それにより口伝承で伝わっていたことが、事実関係もわかり証明できるようになることはうれしいものです。調査研究は、すぐに人から評価される派手なものではなく、とにかく地道に行っていくものですので根気と誠実さが要求されます。

展示は、まさしく作品を企画展覧会場や常設展示場（当館ではコレクション・ギャラリー）に陳列するので、研究員の感性が問われます。どんなにすばらしい作品でも展示の方法によってはすばらしく見えないことがあります。作品が本来持っているすばらしさや調査研究に基づいた作品と作品との関係性や順番など、さまざまなことを考えながら行います。とくに自分が企画から携わった展覧会では、作品がうまく展示できたときには喜びもひとしおです。写真はカルロ・ザウリ展の展示写真ですが、重量物の陶芸作品を展示台に置き、作品の状態や展示上の安全を確認したりしているところです。説明がなければただ作品を見ているだけのようですが、この確認作業は見に来ていただく来館者の方や作品にとっても開催中の作品の保護や安全も含め重要なことです。

思いつくままに書きましたが、研究員の仕事としてはこの他にもさまざまなものがあります。それらはあたりまえですが、美術館である以上、美術作品にすべて関係してきます。美術作品を後世の人々にできるだけ良い状態で引継ぎ、また、作品を展示して国民の皆様に見ていただくという有効活用に努めることも忘れてはならない重要な仕事です。



京都国立近代美術館外観

京都国立近代美術館
〒606-8344 京都市左京区岡崎円勝寺町
TEL：075-761-4111　ハローダイヤル：075-761-9900
URL：http://www.momak.go.jp/



来館をうながす講演会・イベント

東京国立博物館
学芸企画部博物館教育課教育講座室長 **白井克也**

東京国立博物館（東博）では、講演会や列品解説など、展示と連繋した企画を多数開催しています。これらを企画する立場から、東博の魅力を高め、新たな来館者を獲得する試みを紹介しましょう。

細かい分析を省いて強引に類型化すると、東博のリピーターには、博物館を日常の一部とする層（高齢者が多い）と、博物館を非日常（よそ行き）の場とし、特別展や申込制の講演会など、イベント性が高まると来館する層（主婦が多い）という、行動パターンの異なる2つの層があります。このことは、新たな企画を告知するとき参考になります。企画について事前申し込みを募るのは、多数の希望者が見込まれるからでもありますが、申込制にすることでイベント性を高め、特定の層（主婦層など）や、これまであまり来館されたことのない人々に応募や来館を促す効果も期待できるのです。

申込制の企画について、以前から頭が痛かったのは、夫婦などで応募して一方だけが当選した場合、気まずいので2人とも参加をやめてしまう、ということでした。夫婦のほか、親子、兄弟、友人、同僚、師弟、介護などの理由で、2人1組で博物館を楽しみたい人々は少なくありません。企画参加の権利と引き換えに、彼らに別行動を強いてしまっては、博物館の居心地は悪くなるばかりでしょう。そこで、昨年度から2名の連名応募ができるよう、試行を始めました。ある程度効果が確認されたので、今年度は特別展共催者の理解も得て、「フランスが夢見た日本」「対決―巨匠たちの日本美術」「スリランカ展」の記念企画で連名応募が可能になりました。


東京国立博物館外観

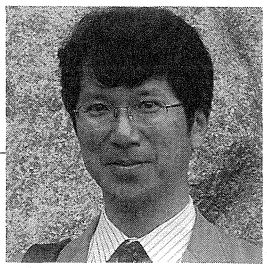

夜桜コンサートの風景（出演：ヴォクスマーナ）

東博にとって比較的手薄な来館者層は、現役で働いておられる世代でしょう。週休2日が一般化したとはいえ、現役世代にとっては、週末の講演会よりむしろ仕事帰りに寄りたいという声もありました。そこで昨年度より、特別展期間の金曜日夜間開館（閉館8時）を利用した「イブニングレクチャー」や列品解説を開催しました。今年度は、夜間開館をさらに周知し、新たな来館者を獲得するため、より戦略的な取組を始めました。まず、春の庭園開放時に連日夜間開館を実施した「博物館でお花見を！」の際は、「夜桜セミナー」2回、「夜桜コンサート」1回をすべて金曜夕刻に行って「おトクな金曜日」を印象づけ、続く「国宝薬師寺展」開催中の「万燈会」、8月のインドネシア影絵芝居「ワヤン」の公演、さらに秋の「スリランカ展」記念トークショーなど、金曜夕刻に一連の企画を行っています。

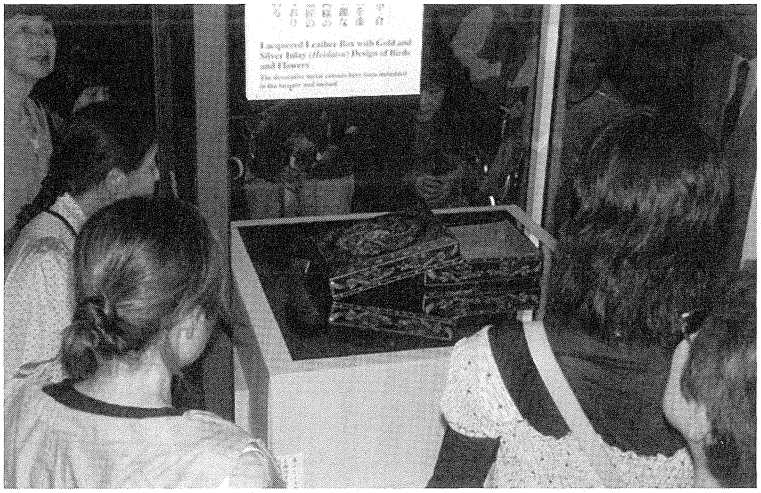
東博の講演会や列品解説は歴史も古く、それらへの参加を日常の一部としておられるリピーターも多いので、これらの企画については安定したサービスを保証するとともに細部の改善を積み重ねています。安定が信頼につながるからです。目新しい企画を打ち出し、新たな来館者を獲得することが、信頼に対する裏切りを意味してはならないことを、常に自戒しつつ実施しています。

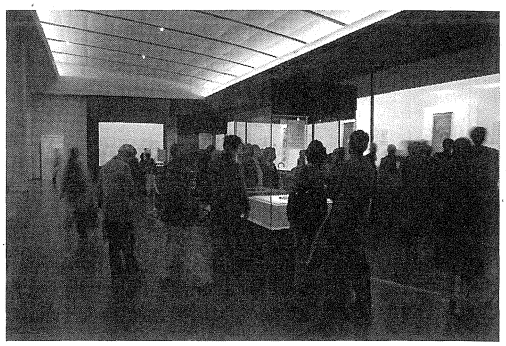
東京国立博物館
〒110-8712 東京都台東区上野公園13-9
TEL：03-3822-1111　ハローダイヤル：03-5777-8600
URL：http://www.tnm.jp/

第60回正倉院展
宝物選びと展示の裏側



奈良国立博物館
学芸部工芸考古室長 内藤　栄





奈良国立博物館と聞いて、毎年秋に行われる正倉院展を思い浮かべる人は多いと思います。正倉院展は戦後間もない昭和21年に始まり、途中3回東京で開催されたほかは、毎年奈良国立博物館で開催されてきました。正倉院展の時期、奈良の寺社では特別開扉や宝物の公開が行われるため、それに合わせて多くの方が奈良を訪れます。正倉院展は古都奈良の秋の風物詩としてすっかり定着しています。

多くのファンに支えられている正倉院展ですが、意外と知られていない一面もあります。たとえば、宝物の選定方法です。正倉院宝物は宮内庁正倉院事務所によって管理されており、正倉院展への出品宝物を選定するのも事務所の仕事です。展覧会における出品リストの作成は、私たち学芸員にとって重要な仕事であり、腕の見せどころです。学芸員として、出品宝物の選定に携われないのは隔靴掻痒の思いがありますが、これがかえって毎年思いがけない宝物との出会いを生み出します。

正倉院宝物は総数9000件を数えると言われていますが、正倉院展に出品される数は70件ほどにしかすぎません。仮に毎回違う宝物が出品されるとしても、60回で4200点ほどが公開された計算になります。いまだに全宝物の半分にも達していません。もし、学芸員の私が出陳宝物を選ぶとしたら、工芸的に優れ、人目を惹く品ばかりに目が向くことでしょう。しかし、日々宝物に接している正倉院事務所の方たちの選定は、学芸員の目からは漏れてしまうような宝物まで取り上げています。思いがけない宝物と出会えるのはそのためで、そのような宝物にこそ新たな発見の可能性を秘めています。

ところで、一度出品された宝物は、少なくとも10年は出品されない慣習があります。もし鑑賞しづらい展示方法をしてしまうと、再会までファンの方たちを10年以上待たせることになります。一度出陳されたきり再び展示されていない宝物も数多くあります。そのため、展示の際には鑑賞する人に心残りを感じさせない工夫を凝らすよう心がけています。たとえば、立体物は正面だけではなく全ての面が見えるケースを選び、また箱では蓋を開け内部が見えるように配慮します。うるさくない範囲で鏡を使って見えない部分を減らします。また、作品を置く高さも重要で、宝物がもっとも美しく見える位置を選び出します。

しかし、近年正倉院展は入場待ちに長蛇の列ができるほどの人気で、館内でもケースの周りに人垣ができています。年に一度のことですから仕方がないとはいえ、じっくりと鑑賞するにはほど遠い環境です。一人ひとりがじっくりと宝物と向き合い、豊かな時間を過ごすことができる工夫が、私たちの新たな課題となっています。


奈良国立博物館外観

奈良国立博物館
〒630-8213 奈良県奈良市登大路町50
TEL：0742-22-7771
URL：http://www.narahaku.go.jp/



美術館教育、研究員のひとりごと

京都国立近代美術館
主任研究員 **山野英嗣**

近年、公立美術館をはじめ、わが国立美術館でも、「普及教育」活動の一環として鑑賞教育を中心とした「美術館教育」をすすめるプログラムが活発化しています。私事で恐縮ですが、京都に異動する以前に勤務していた兵庫県立近代美術館（現兵庫県立美術館）は、全国で最初に「普及課」が設置された館で、筆者も在職15年のうち6年間をこの普及課配属の学芸員として、まさに「普及教育」一途に、額に汗してさまざまな仕事をこなしてきました。

「普及」という言葉が象徴的に示すように、誰もが「美術」に親しむことを前提に、美術館も学校現場と連携するよう力を入れ、さらに夏休みともなれば、「夏休みこども美術館」などと称したプログラムが、どこでも盛んに行われています。けれども、現状の教育制度が標榜する平準化というとらえ方だけではなく、その一方で、自発的に「美術」に強い関心を寄せる子どもたちを育ててゆくことも大事ではないか、というのが私の持論です。

40年以上も昔の話ですが、小学校時代から、近くにあった大阪市立美術館に一人で足を運んで、すっかり美術好きになってしまった私は、他の教科の勉強を放り投げ、図画工作の時間だけが毎日続けばどんなに幸せだろうと思っていました。当時の独立少年展や独創美術展への入選を目指し、今の美術教育界が、美術に親しむようにと躍起になっている姿からすれば「優等生」だったかもしれません。そして将来は、何か美術関係の仕事につきたいと自然に思うようになったとき、今も忘れられない衝撃的な出来事に遭遇したのです。それは中学2年のとき、美術の教科書に、まったく滅茶苦茶にしか思えない「抽象絵画」の図版を見つけ、なぜこんなものが教科書に掲載されているのか、さっぱりわからなかったからでした。それは「カンディンスキー筆『円の中』」とあり、今も私は、その教科書を大切にもっています。大げさにいえば、はじめて「美術を疑った」この体験こそが、その後の私の人生を決定づけたようなものでした。


京都国立近代美術館外観

ある学校から、団体鑑賞で美術館に大勢の子どもたちが来たときに（近年はこうした機会はめっきり減ってきたようですが）、駆け足で作品を通り過ぎ去る子どもたちにまざって、必ず一人や二人、熱心に作品を見つめている子がいます。私は、現在の「普及」を目指す状況からは逸脱するかもしれませんが、このような子どもたちのために、もっと「美術」に関心が深められるような何か特別のプログラムが用意できないか、そして「美術」のサークル活動に属しているような子どもたちにも、美術館として特別の時間を与えられないかと、いつも思っています。そうした子どもたちの中に、きっと将来われわれ研究員の後輩となる卵たちが、いるはずだからです。



大阪市立美術館正面にて筆者（1961年）

京都国立近代美術館
〒606-8344 京都府京都市左京区岡崎円勝寺町
TEL：075-761-4111　ハローダイヤル：075-761-9900
URL：http://www.momak.go.jp/

美術館と学校をつなぐ鑑賞教育



東京国立近代美術館
主任研究員 一條彰子



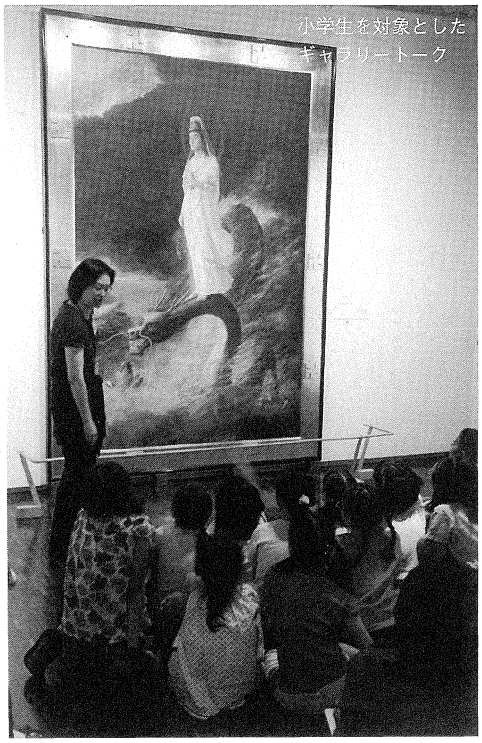
受講生資料



グループワーク「課題作品の鑑賞」

子どものときは絵や工作が好きだったのに、大人になって「美術館に行かない」「美術は苦手」となる人は多いようです。でも、もし小学生や中学生のころに、自由でわくわくするような鑑賞体験をしていたら？　美術館はもっと親しみを持てるものになったのではないでしょうか。

「将来の来館者を育てたい」という願いから、美術館は今、子どもを対象にした鑑賞プログラムを、さまざまに工夫して行っています。たとえば最近、展示室でよく見かけるギャラリートーク。子どもたちが作品を取り囲むように展示室の床にぺたんと座り、学芸員やボランティアの「何が見える？　どんな気持ち？」といった問いかけに、どんどん応える様子が見られます。ここでは技法や美術史といった作品情報は後回し。なにより自分の目で色や形を見つけることや、自分で考えたり感じたりすることが優先され、友達と一緒に話し合いながら作品の見方を深めていく方法がとられます。



小学生を対象としたギャラリートーク

子どもの感性を育てるのに有用なこの鑑賞教育を、美術館と学校が連携することでより質の高いものにしようと、国立美術館は3年前から、「美術館を活用した鑑賞教育のための指導者研修」を実施しています。今年は、全国から131名の先生や指導主事、学芸員を集めて、7月28日から3日間、東京国立近代美術館（北の丸公園）と国立新美術館（六本木）を会場に行われました。

研修の内容は、講演や事例紹介を聞いたり、実際のギャラリートークを見学したりと盛りだくさんですが、一番の特徴は、学芸員と先生の混成で行われるグループワークにあるといえます。グループワークでは、初日にじっくり課題作品を鑑賞し、2日目に子ども向けの鑑賞プログラムを作り、3日目に発表します。この一連の共同作業のなかで、興味深いことに多くの受講者が、学芸員と先生の違いに気づき、最初は戸惑います。

実は、学芸員と先生では、ものの見方や考え方に大きな違いがあります。これは、美術館と学校の役割が違うことを考えれば、当然のこととともいえます。例えば学芸員は「作品」からプログラムを考えますが、先生は「子ども」から発想します。また、学芸員は子どもを評価する必要はありませんが、先生は授業後に必ず何らかの評価を下さなければなりません。美術館と学校の連携は、このような違いを知ることから始まるのかもしれません。学芸員と先生が大いに語り、時には笑いながら立場の違いを乗り越え、子どもと鑑賞について語りあうことも、研修の目的のひとつです。

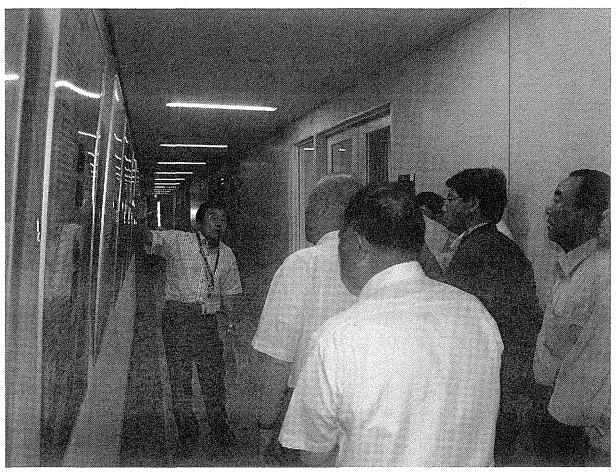
私自身も国立美術館の一学芸員ですが、このような美術館と学校をつなぐという役割を担う場合、異なるフィールドを理解することが大切だと感じています。科学研究費による大学や小中学校との共同研究などを通じて、「鑑賞教育」を理論と現場双方から研究できたことや、今回の学習指導要領改訂にあたって小学校図画工作解説書の作成に協力した経験が、このような研修を企画する際にも役立っていることを感じながら、日々の業務にあたっています。

東京国立近代美術館
〒102-8322　東京都千代田区北の丸公園3-1
TEL：03-3214-2561　ハローダイヤル：03-5777-8600
URL:http://www.momat.go.jp/

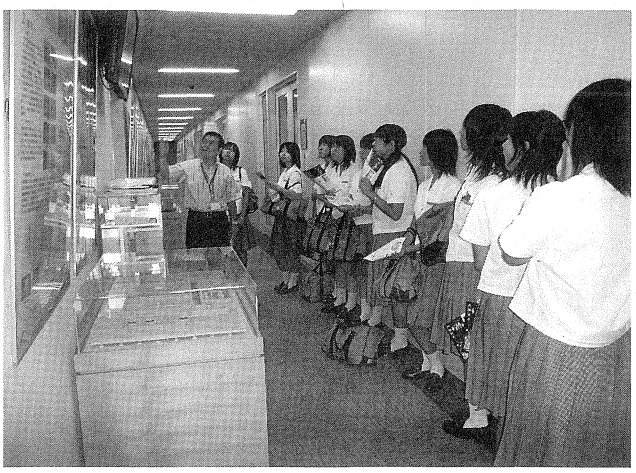


心を伝えるバックヤードツアー

九州国立博物館
学芸部博物館科学課長 本田光子



一般バックヤードツアー（日曜日）



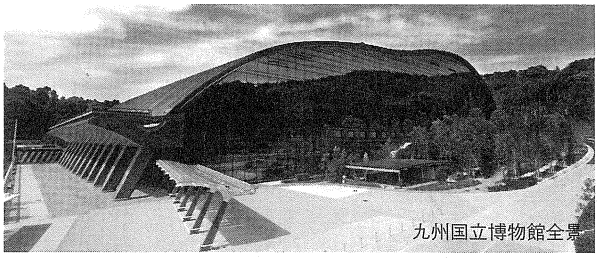
団体バックヤードツアー（火・金曜日）

九州国立博物館（以下「九博」）には「九博探けん隊」という無料見学コースがあります。市民の皆さんをボランティアが案内するツアーです。展示室や教育普及ゾーンの案内、環境建築である施設の紹介や、ガラス越しに収蔵庫や保存修復施設等を見学し建物階下の免震層へも入ります。これらのツアーの他に、特に博物館科学・保存修復については関連施設内の特別公開日を年に1～2回設けています。免震層をはじめいわば博物館の心臓部へ一般の方々をご案内する見学を「バックヤードツアー」と総称しています。

バックヤードツアーは「文化財をしらべ守り伝える」博物館機能について広くご関心ご体験をいただくことで、文化財の保存継承への理解を深めることができると考え、開館時から実施してきました。収蔵庫窓からは木を用いる保存の文化や壁の構造を、修復施設ではプロフェッショナルな技術者たちの仕事に打ち込む姿を、免震層では赤・緑・黄のレゴカラーの免震装置を。これらをとおしてモノを守り伝える知恵と工夫への共感を期待し、市民の皆さんがその心を次世代へ伝えてほしいという強い願いから開始したものです。文化財の保存を担当する研究員と教育普及を担当する研究員で協議し企画しました。

例えば一般に博物館では収蔵庫に窓を設けることは決してしませんが、九博では11室の収蔵庫のうち1室に窓を設け、見学時だけシャッターを開けることにしました。収蔵庫には、気候風土と巧みにつき合いながら脆弱な文化財を守る知恵と工夫が凝縮しています。日本は四季の変化に恵まれ、繊細な美術工芸品をつくり、また守り伝える文化を育んできました。厚い空気層を挟んだ二重壁。天井、壁、床、棚そして保存箱も木製が基本。博物館は、この国の風土で培われた知恵と心をもプラスチック、フェイク世代へ伝える場所でもあると思うからです。

バックヤード、つまり博物館の管理・学芸エリアの最奥の修復施設では国の選定保存技術保存団体の技術者たちが文化財修理とその技術の継承に努めています。つまり、博物館は文化財そのものの修理保存と同時にその技術もまた伝えている場所なのです。ボランティアガイドツアーにはすでに2万人以上の方々が参加されました。こうした人から人への技術と心の継承の姿もまた、ボランティアの皆さんの心と言葉で多くの市民の皆さんへ伝えられていることでしょう。



九州国立博物館全景

九州国立博物館
〒818-0118 福岡県太宰府市石坂4-7-2
TEL:050-5542-8600
URL:http://www.kyuhaku.jp

九州国立博物館の教育普及事業
「きゅうぱっく」の挑戦



九州国立博物館
交流課主任研究員 永井真佐美



学校貸出キット
「きゅうぱっく」



学芸員の仕事を模擬体験してもらう
「ジュニア学芸員事業」



「きゅうぱっく」を使ってのワークショップ

九州国立博物館は10月に開館3周年を迎えますが、すでに8月に来館者数500万人を突破しました。市民共生型の博物館を目指して、ユニークな取組をしてきた結果ですが、体験型展示室「あじっぱ」もそのひとつです。こどもを主対象とした常設で無料の教育普及ゾーンで、平日は修学旅行や社会科学習の学校団体、休日は家族連れで賑わっています。

「博物館に関係のある資料を授業のなかで活用できないか」そのような思いから生まれたのが、学校貸出キット「きゅうぱっく」です。「本物に触れる感動を味わってほしい」「学習内容に対する理解を深めることができる」「実際に博物館に足を運びたくなる」という3つの観点で制作を進めました。文化交流展示室（常設展示室）に関連するキットが3種類、「あじっぱ」に関連するキットが2種類あり、すべてのキットに児童・生徒の手元に残るアイテムを入れています。キットの活用マニュアルには各アイテムの解説や使い方は掲載していますが、授業での活用方法はあえて掲載していません。児童・生徒や学校の現状に応じて、学校現場の先生方に創意工夫を凝らし柔軟に活用してもらいたいというのがその理由です。今年度、地元の小・中学校を対象に貸出を開始しましたが、年度内に福岡県内の小・中学校、将来的には全国的に貸出をしたいと思っています。この夏「きゅうぱっく」は第2回キッズデザイン賞でコミュニケーションデザイン部門賞を獲得しました。8月に東京のTEPIAプラザでキッズデザイン博が開かれ、ワークショップは大勢の家族連れで賑わいました。使用したのは弥生・古墳時代に関するキットでしたが、歴史を学習していないこどもたちも目を輝かせて話を聴き、楽しそうに遊んでいる姿を見て、「きゅうぱっく」の魅力を再確認したと同時に、運用に向けての課題も見えた1日でした。

高校生を対象として開館前の平成14年度からモデル事業として始められたのが、「ジュニア学芸員事業」です。近隣の筑紫地区の高校生のなかで、歴史・美術や博物館に興味のある生徒を募り、数回にわたり学芸員の仕事を疑似体験してもらうという取組です。昨年度は7校21名の生徒が参加し、学芸員の話を聴いたり本物の文化財を扱う演習を行ったりしました。回が進むにつれて生徒たちは、博物館の役割や学芸員の仕事について総合的に理解できるようになっていきました。また、職業や自分の適性についても真剣に考えるようになりました。彼らのなかから未来の「九博の学芸員」が誕生するかもしれません。

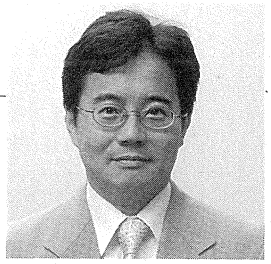
学校との連携を中心に九州国立博物館の教育普及事業について述べてきましたが、学校団体が事前学習で使用できるようなワークシートや学習の手引きの制作はまだ企画段階です。今後は、現場の先生方の意見を取り入れながら、さらに学校との連携を強化していきたいと思っています。「きゅうぱっく」がその契機となってくれると私は信じています。

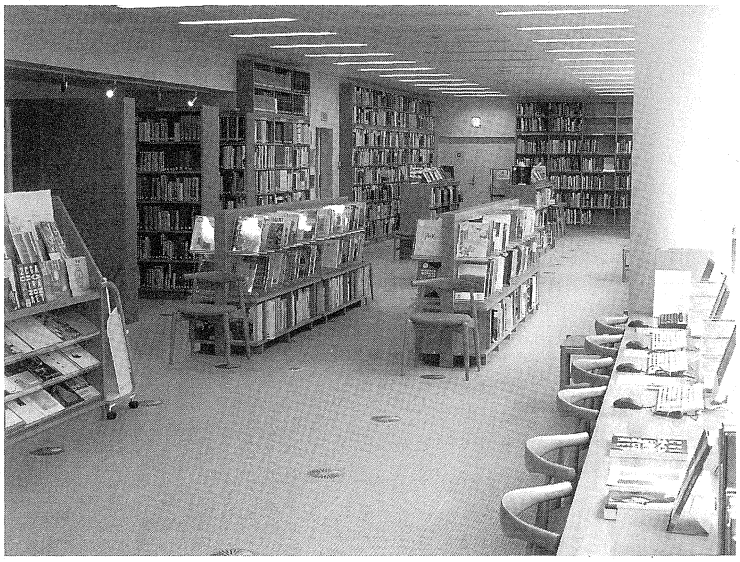


「あじっぱ」全景

情報の宝庫！展覧会カタログを愉しむ

国立新美術館
主任研究員 平井章一





国立新美術館のアートライブラリー

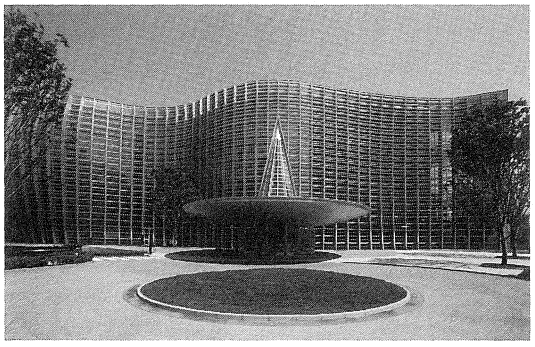
美術館の展覧会場の出口で、必ずといってよいほど売っているものがあります。そう、展覧会カタログです。日本語で展覧会図録ともいいます。「図録」という名のとおり、主として展覧会に出た作品の図版が収録された冊子です。

「来場の記念品として」「家でもう一度展覧会を味わうために」と購入される動機はさまざまですが、ほとんどの方のお目当ては図版ですから、製作する側の私たちは、図版の色がどれだけ実物に近く出ているか、また図版の大きさなどに神経を使います。カラー印刷が高かったころは、限りある制作費のなかでどの図版をカラーにするかにも悩んだものでした。以前に作品を撮ったフィルムがあっても、古くて退色している場合は、カメラマンを雇って新たに撮り直します。最近修復された作品なども、修復前のフィルムを使うわけにはいかないので、これも撮り直しです。つまり、カタログには、その時々の作品の画像の最新情報が盛り込まれているといえるでしょう。

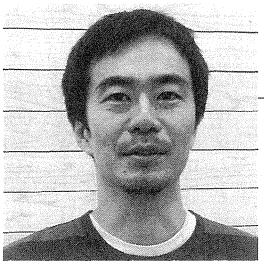
展覧会カタログには、ほかにも作品や作者に関連する最新の情報が盛り込まれています。作品解説や論文、作者の年譜、参考文献の目録などです。展覧会の準備中には、新しい作品や資料が発掘されたり、新しい事実が発見されたりします。展覧会の企画者は、それらを展覧会本体やカタログに反映させ、作品にそれまでになかった解釈を加えたり、作者の知られざる側面に光を当てます。この、“新しさ”や“発見”をいかに打ち出すかが、実は展覧会にかかわる私たちのモチベーションなのです。どんな仕事でもそうですが、せっかくやるのですから、過去の繰り返しではつまらないですよね。

このように展覧会カタログはたしかに「図録」ですが、単なる図版集でもありません。大げさにいえば、美術館や博物館での研究の最新の成果が反映された「研究書」でもあります。昨年1月、東京六本木に、戦後日本で発行されたいろいろな展覧会カタログが誰でも自由に見られる場所ができました。それが国立新美術館です。国立新美術館は、作品を収集する代わりに美術に関する情報や資料を収集し提供する役割を持つ、これまでとは異なるタイプの国立美術館です。ここは現在、約53,600冊のカタログを所蔵し、アートライブラリー（一部は特別資料閲覧コーナー）で皆さんにご利用いただいています。

カタログは、美術に関する情報の宝庫です。好きな展覧会カタログをいくつか選んで、机の上で時空を超えた展覧会めぐりをされるもよし、研究に活用いただくもよし、竹林が見える窓際のカウンターに座り、ただぼんやりとページを眺めるだけでもかまいません。国立新美術館のアートライブラリーで、皆さんそれぞれのカタログの愉しみかたを見つけてください。

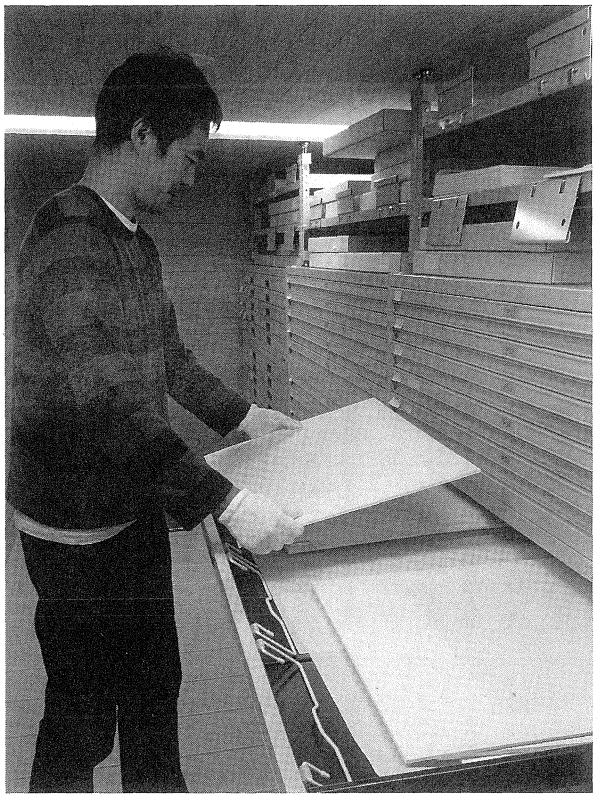


国立新美術館
〒106-8558　東京都港区六本木7-22-2
ハローダイヤル：03-5777-8600
URL：http://www.nact.jp/
※アートライブラリーと特別資料閲覧コーナーの利用時間等は、ホームページをご覧ください。



版画・素描との対話

東京国立近代美術館
主任研究員 鈴木勝雄



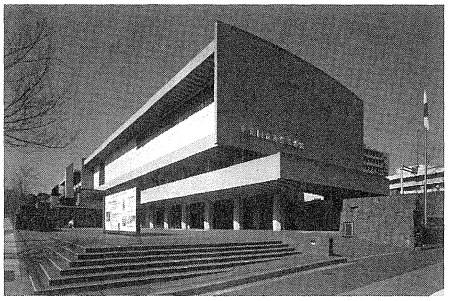
収蔵庫にて作業中の筆者

私が所属する美術課版画素描室は、東京国立近代美術館のコレクションのなかで版画と素描といった「紙」の作品の収集、保存、調査を担当します。多くの作品は写真にあるようにマップケースの中に保管されており、必要に応じて額装して展覧します。これは省スペース化を図ると同時に、平置きをすることで作品によけいなストレスをかけないというメリットもあります。紙の作品はデリケートです。経年変化によるしみや変色、酸化による紙の劣化など、その状態には注意を払う必要があります。つねに劣化は進行しているという前提のもと、こまめに作品に触れることを心がけています。

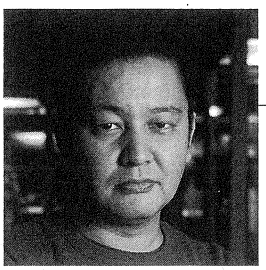
さて、美術館の2階から4階を占める所蔵作品展「近代日本の美術」では、どうしても油絵と日本画と彫刻が展示の中心となっており、私が扱う版画・素描という比較的小さな作品は、大作の陰に隠れてしまう存在かもしれません。日本の美術史の語られ方においても、複数性を持つ版画は、唯一性を誇る絵画に比べて低く位置づけられてきたきらいがありますし、素描は、本画に至る習作やプロセスと見なされてきました。しかし、大作とは異なる魅力が、これらの小品にあることも事実です。

版画には、絵筆による描画とは異なって偶然が作用する余地が多く、その不自由さの中に、イメージの誕生を待つ錬金術のような緊張と興奮があらわれます。大きな宇宙が封じ込められた小画面は、観客の深い凝視を誘うでしょう。一方、素描には、本画では消えてしまう制作者の感性の初発の閃き(ひらめ)を感じ取ることができないでしょうか。線の逡巡(しゅんじゅん)や描き直しなどの試行錯誤が、創造のスリリングな過程を伝えてくれます。このような特質を持つ版画や素描という作品には、大作に接するときとは異なる鑑賞の姿勢が求められます。小さな紙の上で展開するドラマに出会うには、鑑賞者自身がそのささやかな世界に入り込み、感性の感度を高めて、細部の魅力に注意を払わねばならないのです。

版画や素描を鑑賞する最適な方法は、手にとって眺めることなのかもしれません。収蔵庫の中、マップケースに収まっている作品を順番に見つめていると、ついそんな考えに捕われます。もちろん通常の美術館の展示は、額装して壁にかけるわけですが、鑑賞者の方は、さも自分の手の上でこれらのイメージの結晶を見つめているように想像を膨らませてほしいのです。光の角度を変えたり、画面との距離を変えたりすることで、作品はその都度新たな貌(かお)を見せます。こうした一対一の静かな対話を楽しんでいただけるよう、版画コーナーの展示はゆったりと構成されています。



東京国立近代美術館
〒102-8322　東京都千代田区北の丸公園3-1
TEL：03-3214-2561　ハローダイヤル：03-5777-8600
URL：http://www.momat.go.jp/

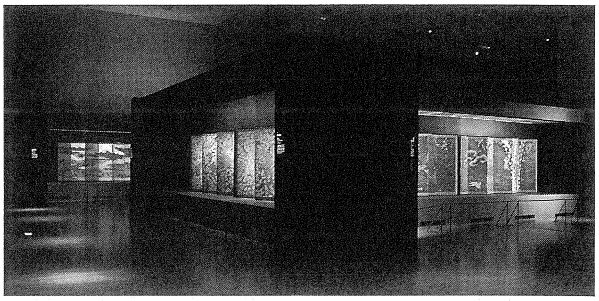


写真：今井隼人

江戸絵画の魅力を伝える光の力

東京国立博物館
学芸企画部企画課デザイン室長 木下史青





2006年真夏の49日間、東京国立博物館 平成館において、特別展「プライスコレクション 若冲（じゃくちゅう）と江戸絵画」が開催され、31万7712人の入場者を記録してから、はや2年以上の年月が経ちます。

いまでも眼を閉じると、展覧会場の一部で行われた“光の展示室”の風景が、昨日のことのように鮮やかに蘇ります。金屏風の輝きが、移ろう光による光景が、1点1点の筆致や色彩が、瞼（まぶた）の奥に焼きついています。

“光の展示室”すなわち《光と絵画の表情》コーナーは、特別展会場・第1室～第4室のうち、最後の第4室において実施されました。その展示テーマについて、ジョー・プライスさん（実業家、日本絵画コレクター）の言葉を引用します。

日本美術を鑑賞する際、光の果たす役割は非常に重要である。

展覧会の約1年前、僕と絵画研究員との2人は、プライスさんの考える光を体験し、展覧会場構成を打ち合わせるため、ロサンゼルスのプライス邸へ出張しました。

プライスさんは、太陽の光で見ることが重要だとくり返し言い、窓のブラインドを調整して、絵にあたる光をゆっくりと調節しながら、僕達にたくさんの江戸時代の絵画コレクションを見せてくれたのです。

まず驚かされたのは、「光を暗くしてみた方が、もっとよく見えてくる絵がある」ということ。金屏風のように、金箔を紙に貼って、そこに絵を描いたり、金の絵の具で描いたりした絵は、光を落として見たほうが、美しい輝きを発するということでした。光があたったことで美しい絵が見えるというだけでなく、それはとても立派に見えたのです。

その他にも、金箔とは対照的に“銀箔の絵は光を落とさずに、もっと強い光を与えたほうがいい”“水墨画は横方向からの絞り込んだ柔らかい光で見ると絵に深い奥行きが現れてくる”というようなことを教えてくれました。

そして最後に、プライスさんからリクエストがあり、「こんな自然光のような光で私のコレクションを展示してくれないか」。一緒に絵を見ながらの無言の注文でしたが、それは、従来の博物館照明のセオリーとは異なる、日本絵画の魅力を、最大限に引き出す光を作ってほしいという、僕自身への強烈なメッセージでもあったのです。

帰国後、さっそくデザイン上の問題を検討しました。ガラスケースに入れたのでは、プライスさんの考える光の見せ方の魅力が半減します。保存環境の研究員と、絵画をガラスケースに入れずに、かつ保存上安全に展示するための、空調の風がなるべく作品に当たらないような、庇（ひさし）付きの展示台がデザインされました。

また、自然光のように変化する、新しい照明手法を提案したのですが、その方法が、プライス邸で見たように、本当に絵を輝かせるかどうか、実はとても不安でした。その不安を解消するために、館蔵の金屏風を使って照明実験を行ったのです。

実験用照明のスイッチを入れると、少しずつスポットライトが点いて、少しずつ明るいシーンになると、暗闇の中から金屏風が輝き始めたのです。この照明なら、ロサンゼルスのプライス邸で体験したあの光を、お客様に伝えることができる！

このように、プライス邸での調査や、専門研究員の協力があって、“光の展示室”はでき上がったのです。

東京国立博物館
〒110-8712 東京都台東区上野公園13-9
TEL：03-3822-1111
URL：http://www.tnm.jp/

お水取りの本当の魅力



奈良国立博物館
学芸部長 西山 厚

奈良に春を呼ぶ東大寺二月堂の「お水取り」は、正しくは「修二会」といい、3月1日から14日間行われます。しかし、ほとんどの人々は大きな松明から舞い散る火の粉に歓声をあげるばかりで、「お水取り」の本当の意味を知りません。大きな松明は、実は暗闇のなかで登廊をのぼっていく練行衆と呼ばれる修行僧の足元の明かり取りにすぎないのです。

この行事は、奈良時代、天平勝宝4年（752年）に、東大寺の実忠和尚によって始められ、1257年間、一度の中断もなく続けられてきた「不退の行法」です。1257年もの長い間、一度の中断もなく続いている行事は、世界でもおそらくは「お水取り」だけと思われます。

練行衆は二月堂の中で何をしているのでしょうか。練行衆は本尊の十一面観音に向かっておわび（悔過）をしているのです。なぜおわびをするのでしょうか。かつて災いは人間が悪いことをするから起きると考えられていました。練行衆はすべての人々に代わっておわびをし、そして「天下安穏」「五穀成熟」「万民豊楽」を祈願しているのです。

別火と呼ばれる9日間（閏年は10日間）の精進潔斎の日々を終えた練行衆は、2月末に二月堂の下方にある参籠宿所に入ります。そこから期間中、毎昼毎夜、登廊をのぼって二月堂に入り、悔過をします。午後7時に二月堂へ登る際、練行衆の足元は大きな松明で照らされます。練行衆が二月堂に入ると、役目を終えた松明は、二月堂の舞台の欄干で振られ、舞い散る火の粉に詰め掛けた人々は歓声をあげます。そして松明が終わると人々は家路につきますが、「お水取り」の夜の行法はそれから始まります。松明が消えてから、早い日でも5時間、遅い日は9時間も、二月堂のなかでは「悔過」と「祈願」が繰り返されるのです。

「お水取り」には何度も存続の危機がありました。1667年に二月堂が焼失した際には、翌年と翌々年は仮堂でおこないました。最大の危機は1180年12月の平氏による東大寺焼打ちでした。大仏殿が焼け落ち、大仏も上半身が溶けてしまいました。寺領が没収され、僧侶の離寺が相継いだ東大寺は、すべての法会の中止を決めます。しかし、11人（のち4人が加わる）の僧侶がその決定に反対し、「お水取り」だけはやると主張しました。そして東大寺執行部の決定に背き、



国宝 「二月堂」 外観

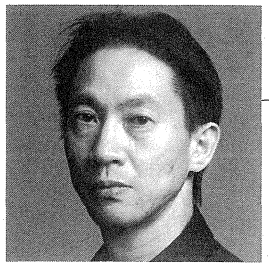
その年も「お水取り」をやり遂げました。

時が流れ、僧侶が替わっても、「お水取り」の基本的内容は変わりません。作法の区切りを知らせる役割をもつ鈴は独特の形をしていますが、日光・男体山の山頂から発掘された奈良時代の法具と同じ形です。法具を造り替える際に、奈良時代の形が踏襲されたからです。人は替わっても行の内容は変えない。法具を造り替えても形は変えない。時代に合わせて変わっていくことも必要でしょうが、ずっと変わらないこともまた大切だと思います。

「お水取り」が続けられてきた1257年間には、多くの人々の限りない情熱や不断の努力がありました。この事実を知って仰ぐ松明の炎の美しさは、今まで以上にさらに心にしみるのではないでしょうか。

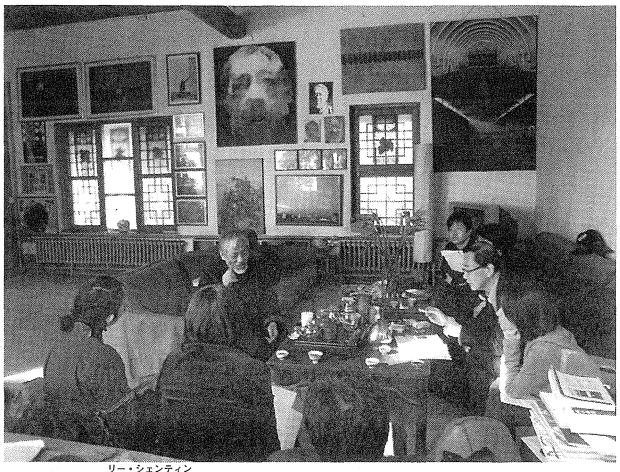
この特別陳列は、「お水取り」がおこなわれる時期にあわせ、「お水取り」に関連のある絵画・絵巻・図像・文書・工芸品などを、毎年少しずつ内容を変えながら展示する恒例の展覧会です。「お水取り」に対して理解を深めていただくことが、日本の歴史と信仰のあり方を正しく知っていただくことにつながると思っています。展示室の中央に設けられた二月堂の礼堂と内陣の大きな模型や、展示室に流れる声明（二月堂のなかで唄われる声楽）は、「お水取り」の場をイメージするために大いに役立つはずです。

奈良国立博物館
〒630-8213 奈良市登大路町50
TEL：0742-22-7771
URL：http://www.narahaku.go.jp/



中国現代美術を歴史化する

国立国際美術館
主任研究員 中井康之



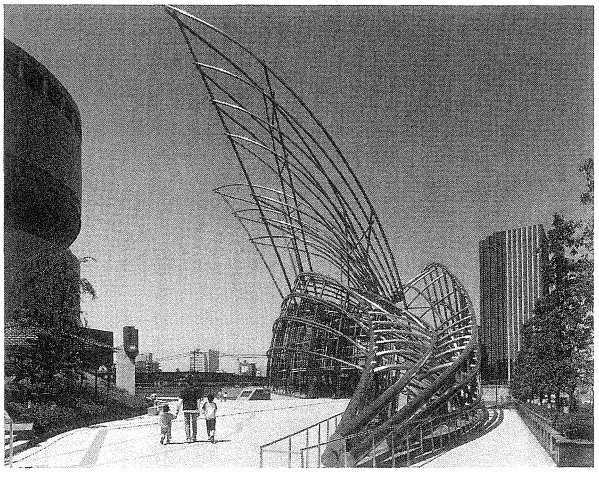
美術評論家・栗憲庭（リー・シェンティン）邸での聞き取り調査（2007年3月北京）

近現代美術を対象に研究活動する美術館人にとって大きな指標となる展覧会に、ニューヨーク近代美術館で同館館長のアルフレッド・バーJr.が企画し、1936年に開催された「キュビスムと抽象芸術」展をあげることができるでしょう。現在ではそのような進歩主義的な歴史観による活動は評価されないかもしれません。しかしながら、巨視的なパースペクティヴによって印象派以降の多様な美術動向を明解な論理とともに縮図として見せたその展覧会は、近現代美術史の大部を形成することになり、その事実は今でも多くの関係者に羨望と憧憬（あこがれ）を抱かせるものです。

中国でオリンピックが開催された2008年夏から、東京・大阪・名古屋と3つの会場を舞台として開催した「アヴァンギャルド・チャイナ―〈中国当代美術〉二十年―」が、そのような大時代主義的なことを図らずも遠望するような状況になったのは、中国現代史を背景として扱わざるを得ないというその対象自体に含意された不可避な歴史的重みと痛々しい歪みが作用したことは間違いありません。中国の現代美術が注目され始めたのは1993年に香港の画廊が仕掛けた展覧会からですが、そのころから欧米を中心に数多くの中国現代美術展が実施されるようになります。近年ではその中国現代美術がアートマーケットを賑わせていることは一般にまで知れ渡っています。

欧米の動きを知る関係者からは、「隣国であるこの日本で、いつになったら中国現代美術展を開催するのか」という声も少なくありませんでした。しかしながら、資金的にも人員的にも格段の差があるこの日本で、欧米と同様の展覧会を行うことは極めて困難であり、傍観視するような状況だったのです。そのような中、国際交流基金からの協力と国立新美術館の参加（後に愛知県立美術館も加わる）を得ることにより、ようやくスタートできる環境が整い、当該展の準備が始まりました。

周回遅れの中国現代美術展を何とか意味のあるものに築きあげるために、これまでの多くの中国展がスター選手を集めることによって構成されていたことに対して、中国現代美術の動向を形成してきた歴史的な作品を陳列して中国現代美術史を具現化することに我々は照準を定めました。今回の展覧会図録に主論文を寄稿していただいた評論家・費大為（フェイ・ダウェイ）氏が、大阪会場での当該展覧会を見て「君たちの考えている展覧会を実現することは無理だと思っていたが、中国現代美術の重要な作品が集まり、展覧会として成功している」という言辞をいただいた時には、正直、肩の荷が下りました。また、多くの作家が「このように歴史的に中国現代美術を扱うことは意味がある」といって協力していただくことにより今回の展覧会が成立したことを最後に銘記しておきたいと思います。



国立国際美術館
〒530-0005　大阪府大阪市北区中之島4-2-55
TEL：06-6447-4680
URL：http://www.nmao.go.jp/